

人口減少・高齢化社会と観光

日々是好日を支える時と場を考える

中崎 茂

1. 今日と明日

明日は果して、明るいことを約束するものであろうか。ともすれば我々は明るい社会、幸せな人生が明日には可能になるであろうと期待しがちである。いわば明日は（あるいは来年は）楽観的で、夢想的な状況になるはずであると、願望に近い思いを込めているようである。

しかし、1995年の阪神大震災を、また2001年の世界同時テロ事件をみても、明日に明るさの正反対である大惨事が待ち構えている、と誰が予想しえたであろうか。そして、現時点においても近い将来にイラク、北朝鮮や中近東など世界平和に対する不安が暗雲のように立ち込めている。このような事例から見ても、明日（未来）が必ずしも手放しで喜べる明るい社会経済の到来を約束するものではなく、さそうである（このことを知りながらも、多くの人々は（小生を含めて）現在の課題、悩みや不安を先送りすることで取り敢えず今日一日をやり過ごしている（少なくとも小生については）のが実情のようである。

2. 「日々是好日」の意義

それゆえ、いたずらに明日に期待をかけ今日一日を疎かにすることを避け、今日を大事な日と認識することが重要である。この心掛は明日が必ずしも明るい未来をもたらすものではないが、少なくとも納得のできる明日

につながることは確かであろう。言い換えれば、明日は、実は今日という一日の中にあり^{注1)}、この今日の一步、小さい努力が明日のステップ・アップをもたらし、より確かな生活や生産の土台づくりにつながるのである。このことはガウディの教会建築やローマ帝国の構築に代表されるように、とくに永続的な仕事はおしなべてこの一日一日の積み重ねの結果として出現している。そして、その一日の過ごし方は、これまでの過去の経験・反省にもとづいて行われる行為の延長線上にあり、その道筋の最先端に位置するものである。この意味において、今日という一日は（概念的に）明日への一步の足掛かりとなるものであり、またこれまでの人生の頂点でもある。この日々の「1日」とは、我々が現実に生きているその一日であり、再び帰らない貴重なものであるとともに、若者に希望を、中年には自信を、そして高齢者には安息をもたらす可能性をもたらす日でもある。

それだけに、自分で出来る限りの力を尽くして働き、友と語り、読書したり、家族と触れ合うなどたえずわずかでもその日に喜びを感じることができたならば、その一日を感謝の下に眠りにつくことができるのでなろうか。このような一日の過ごし方、あるいは人生の日々の生きかたを唐代の禅僧雲門は「日々是好日」^{注2)}と表現している。

3. 高齢化社会と「日々是好日」

日野原重明氏は、この「日々是好日」を高齢者の生き方に照らして、「生を許された今日を自分を活かし好き日として精いっぱい、あるいは淡々と静かに生きる人の姿を写し出す言葉」^{注3)}とみなしている。とはいえ、高齢者はほぼ共通して眼、耳、運動反射等肉体的に衰退の様相を示すようになるが、この高齢者が日々をどう受け止め、どう向き合うかはかなり個人差がある。ある人は、日々を恵みとして享受するが、他の人は職場社会と接点が少なくなり虚脱感や無力感に苛まれるなど、日々の過ごし方や考え方に個人差が大きい。

また『清貧の思想』で知られた中野孝次氏は、自主定年の後に読書と執筆に日々を過ごしており、ある契機からこの状態を「日々是好日」と実感するようになったと述べている^{注4)}。その契機となったのは唐代の禅宗語録「五灯会元」を読み、人の生きている時間を暦や時計で計るのは間違いであると認識してからである。暦や時計は時間を過去から無限の未来に向かう棒のように伸びたものとみなし、人はその中の70～80年を生きているにすぎない。多くの人は人生を長い棒のごく一部に過ぎないと認識しており、そのため人生を「短い」「儂い」という感じをもつことになる。これに対して、禅僧は時間を次のように考えている。「昨日：過去」は既に過ぎ去って無く、「明日：未来」は未だ来ずして無いものであり、あるのは「今：現在」だけである。したがって、今日こそが現在の確かな存在であり、これ以外（今日）に生きる時は無い、と強く認識することが重要である、と。時間をこのように認識して今日を大事に（こだわりをもち）生きることは、時間の面から個人の生きる意欲を高め、その人の存在意義を高めることになる。また、高齢化社会においては、これまでの時間の観念を変え、今日に生きることの

意義を再認識することによって、人々は日々生き甲斐を見だし、そのことが家庭や地域にも生き生きした雰囲気醸し出すことにつながる。このことを学生など若者も日々のもつ意義を再認識し、日常生活を見つめ直し一日一日を大切に生きる契機となることを（自己反省を込めて）期待したい。

4. 「日々是好日」と観光リゾート

この日々の生活を重視する生きかたは、過去、現在そして未来という時間にかかわるものである。それでは、この一日一日の意義を再認識し時間を有意義に過ごすための場所や空間は、今後の社会経済環境の下でどう確保し活用すべきであろうか。これまで多くの人はテレビ、自動車など物の所有や身体の一部の機能（例えば、景観を鑑賞する、フランス料理を食する）を満たすだけで十分な幸せを感じてきたが、社会経済の成熟化や高齢化に伴い、物の利用（車によるドライブ）や体験・交流・参加など身体全体や生態；生きるものに価値意識が移行している。この身体全体や生態や自然環境との係わりを求めて、人々が生活の一部として定着をしている活動の代表例の一つは観光旅行である。例えば、

総務庁「高齢者の日常生活に関する調査結果報告」（平成6年）によると、内向的な楽しみ（「テレビ」79.4%、「新聞雑誌」37.0%）とともに外向的な楽しみ（「旅行」30.6%、「散歩、ウォーキング」17.4%）の中で、観光を含む「旅行」は上位に位置している。ちなみにこれを男性でみると外向的な楽しみが主流であり、しかも旅行に対する関心が高い（「男性が老後に楽しむ趣味」（日経新聞：平成13年10月20日）

高齢者およびその予備軍といえる国民の多くにとって、旅行や観光が生活の一部を構成している。余暇時間を享受できる多くの人が多様な生活形態と広範な行動を指向するも

のとすれば、国民が日々を有意義に過ごせる余暇空間を拡大しかつその柔軟な対応（例えば、年代、体力、意向、経験の程度に応じた多様な観光レクリエーションを享受できる場とそれを支援するサポート機能の提供）を図ることが必要となる。

今後はこのような幸せを享受できる場所の確保と整備、それをサポートする宿泊、旅行、情報等のサービスを持続的に享受できることが、とくに望まれている。これまでは 所得、雇用、マンパワーなどが右肩上がりて推移することはほぼ確かな条件とみなし、その前提にたつて社会経済、あるいは観光リゾートが展開されてきた。言うまでもなく現在の社会経済環境は、地球環境の複雑性、資源エネルギー等の有限性が明確になるにつれて、その見直しを余儀なくされている。総人口の減少、少子・高齢化の進展⁵⁾、それに伴う経済所得の低迷等がほぼ確かな方向であると認識した上⁶⁾で、人々が日々是好日を実感し有意義に過ごすための空間（その中でも関心の高い観光、交

流、体験、静養等の空間）の再検討が必要となる。このような空間の意義、機能、位置などの再構築は、これまでとは異なる環境条件（例えば、人口分布や産業配置、交通条件の整備、土地 利用の動向、自然生態環境等）の下で展開する必要がある。その意味において土地・空間のあり方を探究したチューネン、ウエーバー等の古典を改めて繙く日もそれほど遠くないかも知れない。

- 注 1) 亀井勝一郎『黄金の言葉』大和書房、1981年、p.28
- 2) 日野原重昭『老いを創める』朝日新聞社、2002年、p.59
- 3) 同上 p.59
- 4) 中野孝次「老年を楽しむ」日経新聞、2003年、1月20日
- 5) 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」
- 6) 松谷明彦、藤正 巖『人口減少社会の設計』中央公論新社、2002年

（経営政策学部教授）